様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１４１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ０２４１３

研究課題名（和文）三重県で増加する外国につながる高校生の進路形成の課題抽出と解決に向けた重点支援

研究課題名（英文）Identifying issues and providing focused support for resolving career education for the increasing number of high school students with ties to foreign countries in Mie Prefecture

研究代表者
江成　幸（Enari, Miyuki）

三重大学・人文学部・教授

研究者番号：２０２６９６８２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：三重県内の外国人集住自治体では、2010年代後半に外国人生徒の高校進学率が高く安定するようになった。その背景 として、中学校での進路指導や受験準備の学習支援、外国人の生徒と保護者向けの高校進学ガイダンスなどの積み重ねが挙げられる。外国人生徒が多く在籍する県立高校では、日本語を選択科目に加えたり、外国人生徒を支援する教職員を配置する支援が行われている。多国籍の高校を卒業した若者からは、外国のルーツを肯定的にとらえる契機になるという経験が語られた。しかし幼年期の学校でのいじめや、成長とともに周囲から「外国人」として見られる経験が、社会からの疎外感につながることも示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
外国にルーツを持つ子どもたちの進路保障は、多文化共生の重要なテーマである。三重県では、外国につながる児童生徒を対象とする教育支援の充実が図られており、2010年代の後半からは高い高校進学率を維持している。全国に先行する事例として、三重県での聞き取り調査を通じ、教育委員会、学校、学習支援教室による取り組みや、高校を卒業した当事者の進路形成プロセスを明らかにし、移民第二世代の若者への支援に求められる課題を検討した。

研究成果の概要（英文）：In Mie Prefecture, the rate of foreign students going on to high school has remained high and stable since the late 2010s. This is likely due to the accumulation of career guidance and study support for entrance exams in junior high school, as well as high school entrance guidance for foreign students and their parents. Prefectural high schools with many foreign students provide support such as adding Japanese language to elective subjects and assigning teachers and staff to support foreign students. These school settings provide opportunities for students to view their overseas roots in a positive light, but further research is needed to evaluate the trend of tracking foreign students who grew up in Japan into “multinational schools”.

研究分野：社会学

キーワード：外国につながる高校生　外国人生徒の進路形成　多文化共生　移民第二世代

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

少子高齢化が進む先進諸国において、移民第二世代の教育保障と社会的包摂は大きな関心事なっている。受け入れ社会での教育機会と達成は、社会的疎外感を防ぎ、社会参加を確保する重要な鍵である。三重県の外国人住民数は、2020（令和 2）年末に 55,982 人で、県総人口に占める割合は 3.05%だった。製造業の盛んな東海地方の特徴として日系南米人が多く在住しており、国籍別ではブラジル 13,219 人（構成比 24.1%）、ペルー3,094 人（同 5.6%）、ボリビア 988 人（同 1.8%）である（三重県, 2021）。また三重県は、0 歳から 14 歳までの年齢層に占める外国籍人口の割合も各都道府県の上位に位置する。

「外国につながる児童生徒」が多く在籍する県内の自治体では、小中学生での日本語指導や学校の受け入れが進んでいる。日本語指導が必要な生徒の高校進学も増加していることから、義務教育後の進路希望の実現が今後の課題である。義務教育段階では全国的に先進的と位置づけられるが、高校以降の実態把握は乏しく、重点的な支援目標もまだ策定されていない。そこで、三重県の現状を調査し、支援の有効性と課題を検討することが重要であり、外国につながる児童生徒の増加に対応する全国の地域に先行するモデルを提示できる。

２.研究の目的

（１）外国につながる子どもの多い複数の自治体を対象に、支援の状況を整理する。外国につながる生徒が多く学ぶ高校への聞き取りから、進学・就職に向けて生徒が抱える学習上の困難や経済的不安を把握する。

（２）進路形成に影響する要因として、移住者家族の職業観、教育観、生活上の価値意識との葛藤や調整、学校や地域でのメンターの存在などを分析する。 家族の来日経緯と教育方針、学校生活のなかで経験した達成の喜びや困難、進路選択の見通し、実際に役立った支援などについて事例を分析する。

（３）調査地域の教育支援リソースと、分析結果を照ら合わせ、当事者が必要とする支援項目の重点化作業を行い、リソース間の連携とアクセス向上の具体策を検討する。

３．研究の方法

（１）共同研究のメンバーは、それぞれの専門分野で外国人児童生徒の教育支援に携わっており、質的調査を通じて現状を明らかにした。

（２）研究代表者の江成は、三重県下の教育委員会、高校、学習支援教室を対象に聞き取りおよびアンケート調査を行い、外国につながる子どもの教育支援リソースについて把握した。

（３）研究分担者のオチャンテは、ペルー人とブラジル人の若者を対象とした面接を行い、過去のインタビューから数年経ったインフォーマントの追跡調査や、カトリック教会のコミュニティを通じて、ライフヒストリーと進路形成に関するインタビューを行った。

（４）研究分担者の谷垣は有資格の日本語教師としてアカデミック・スキルと就職に直結する日本語教育の知見をもとに、三重県の高校を卒業した南米ルーツの若者に面接調査を行った。質的データをもとに、進路形成に影響を与える要因として、移住者家族の職業観、教育観、生活上の価値意識との葛藤や調整、学校や地域でのメンターの存在、アイデンティティの葛藤などに着目した。

４．研究成果

（１）学習経験に関する質的調査

本研究は、外国にルーツを持ち、家庭で日本語以外の母語環境で育った若者を対象とした。南米出身の家族が日本で働いており、日本で生まれた者を含む。研究期間の1、2年目は、ライフヒストリーに沿った設問を用意し、外国につながる大学生数人に進路形成に関するインタビューを行った。家族の来日経緯、教育方針、学校生活のなかで経験した達成や困難、役に立った学習支援、将来の展望などについて話を聞いた。

インフォーマントは、日本生まれかごく幼い頃に来日し、日本の小中高校を経て大学に進学している。彼らは家庭で母国語を使用していると同時に、学校では日本語に不自由することはなく、

日本語学習支援の対象になったことはない。共通点として、親が熱心に大学教育を望んでいたこと、また、学校の内外で個別学習指導を受けたことで学力に自信がついたという経験が挙げられる。また、進学の理由と目的意識がはっきり言語化されていたことが印象的であった。

ここで学歴研究における「学び習慣仮説」（矢野,2009; 濱中,2013）を参照すると、「積極的な学習経験が一種の成長体験をもたらし、それが現在の能力向上活動につながり、職務の業績に反映する」（中村,2014,98）とされている。これは大学教育の効果に対する仮説であるが、日本の学校および学歴システムへの異文化適応にも相通じる可能性がある。親の強い希望が大学進学の動機づけとなっていることは、三重県での聞き取り調査において、外国出身の子どもを支援するNPO団体や、学習支援ボランティアからも指摘された点である。

インフォーマントの親たちは来日時に就労先が限られ、日本語習得も難しいため、工場での単純労働に従事する者がほとんどである。しかし母国では高学歴を有し、ホワイトカラーの仕事や研究職に従事した経験を我が子に聞かせており、学歴により社会的上昇を果たすことに関心が高いと考えられる。日本全体の学力格差を調査した耳塚によれば、子どもの学力を規定する要因は、塾など学校外の教育費支出、および世帯所得という経済面とともに、保護者による「学歴期待」すなわち「どの段階までの学歴を子どもに期待するか」であるという（耳塚,2007,3-4）。外国人労働者は不安定な雇用環境におかれやすく、教育に必ずしも潤沢な資金を充てられるわけではないが、日頃から親子の会話などを通じて学習へのモチベーション向上が図られていることがうかがえた。

（２）高校進学ガイダンスに関する考察

3 年目は新型コロナの感染拡大により、外国につながる当事者へのインタビュー実施が難しかったため、三重県Ａ市の教育委員会が主催する進学ガイダンスの実行委員会資料をもとに考察した。Ａ市教育委員会が主催する高校進学ガイダンスは、年に２回の開催が定着している。

毎年７月には、市内にある県立高校のうち１校を選んで開催し、会場の学校紹介、施設および部活動等の見学、先輩・保護者からのメッセージを聞くという構成である。９月には公共施設を会場として、高校入試に関する情報とさまざまな高校を紹介する。プログラムでは最初に、三重県教育委員会が入試制度全般、外国人特別枠選抜、学費について説明する。さらに、約 10 校の高校がそれぞれの特色をスライドで説明し、最後に各高校のブースで個別相談会が行われる。近年では、１回のガイダンスにつき、子どもと保護者を合わせて約百名が集まる規模になった。2020 年度は新型コロナウィルスのため中止となったが、その代わりに入試情報の資料配付と、授業料等の支援制度について相談会が企画された。子ども自身が将来の進路を考え、モチベーションを高めるきっかけであると同時に、外国語の通訳・翻訳の充実により、日本の教育システムになじみのない保護者が進学に関する情報に接する貴重な機会となっている。

一方で、文部科学省が設置した「外国人児童生徒等の教育の充実に関する有識者会議」の報告書によると、全国的な課題も存在する。2018 年 5 月に同省が調査した結果、日本語指導が必要な高校生等の中途退学率は 9.6%で、高校生等全体の 1.3%と比べてかなり高い。大学などへの進学率では、全高校生等が 71.1%なのに対し、42.2%と大きな差が生じている（2020,p.20）。日本政府が矢継ぎ早に打ち出した「外国人材」の積極的受け入れ方針は、コロナ禍で一時停滞したが、将来的には日本に家族で定住する人々は増加すると予想される。学校での日本語習得および教科学習に加え、日本の教育システムについて正確な知識を提供し、進路形成の準備を始められるように、外国出身の子どもたちを対象とするガイダンスの整備は不可欠である。

（３）高校を卒業した若者への面接調査

研究期間の 4、5 年目は、三重県の高校を卒業した外国人の若者を対象に質的インタビューを実施し、当事者の声をもとに、進路選択に伴う問題とその解決プロセスを検討した。県内の人口構成をふまえ、家族が南米出身であり、家庭で使用する言語がポルトガル語またはスペイン語の若者に限定した。なお今回の調査対象者には、日本で生まれたか、幼少期に来日した者が多い。

調査対象者のうち、高校を卒業して就職した者のほとんどは、日本語と母語の両方を使う仕事に従事し、英語も加えると、職場でマルチリンガルに対応できる人材としての期待が高いことがうかがえる。一方で、進学した者は、短大または専門学校で職業資格に必要な課程を修める、も

しくは専門技術を学ぶことを目指している。将来の職業に結びつく進学先は、教育費負担が生じるとしても、家族の理解を得やすいであろう。また、高校で実施されたガイダンスをきっかけに具体的な職業を目指した例もあり、キャリア支援の重要性は明らかである。

インタビュー調査では、外国人であるために受けたいじめや不寛容な扱いが記憶に残っている例がみられた。それとは対照的に、多国籍の生徒が通う高校に進んでから級友と気心が通じ、互いに尊重し合うことができたという体験も語られた。多様なルーツを持つ生徒が安心して学べる環境は、肯定的な自己形成の一助になると考えられる。

近年、文部科学省が設置した専門家会議の報告（2020，2021）や日本学術会議の提言（2020）により、外国につながる子どもの高校進学やキャリア支援の重要性が指摘されている。三重県および県内の各地方自治体では、外国につながる小・中学生、さらには高校生を対象とする支援が実施され、先進事例として全国に紹介される機会も増えている。外国につながる若者たちが納得できる進路を選び、日本社会で活躍の場を得ることは、多文化共生の重要テーマといえよう。

（4）高校の外国人生徒受け入れ状況

最終年度は、三重県内の高校に外国人生徒の受け入れ状況についてアンケートを行い、15 校から回答を得た。高校の所在地はおもに三重県の北中部である。このうち、生徒全体に占める外国人生徒の割合が 3 割に達している学科・コースを擁する学校が 2 校あり、その他の学校は在校生の 0.5%から約 5%の範囲であった。

三重県の県立高校には、来日して数年以内の者が対象の特別入試のほか、英語や作文・面接を重視した一般入試があり、入試までの準備期間が短くても挑戦しやすい。また県立高校の国際科コースや、定時制コースのなかには、卒業単位として日本語クラスを選択科目にしている学校もある。

外国人の生徒が多い重点校には、日本語支援の担当教員、通訳担当の臨時職員、キャリア支援員などが配置され、支援が手厚いと言える。外国籍の高校生の人数は全国で増加傾向にあり、三重県は先行例として位置づけられるだろう。ただし、外国人生徒を「多国籍校」にトラッキングする傾向をどのように評価するかは今後に委ねられる。

参考文献

外国人児童生徒等の教育の充実に関する有識者会議「外国人児童生徒等の教育の充実について（報告）」文部科学省,2020 年 3 月.

中村高康「濱中淳子著『検証・学歴の効用』」（書評）『教育学研究』81 巻 2 号，2014 年，98-99.

耳塚寛明「学力格差と「ペアレントクラシー」の問題」『BERD』No.8，2007 年，2-8.

矢野眞和「教育と労働と社会―教育効果の視点から」『日本労働研究雑誌』No.588，2009 年 7 月，5-15.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 江成　幸	４．巻 40
２．論文標題 都市のジェントリフィケーションに埋め込まれた壁画的メディアの考察―ロサンゼルス市街地の事例をもとに―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 人文論叢	６．最初と最後の頁 77-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 江成　幸	４．巻 39
２．論文標題 外国につながる高校生の進路選択に影響する要因の抽出	５．発行年 2022年
３．雑誌名 人文論叢	６．最初と最後の頁 55-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 江成　幸	４．巻 38
２．論文標題 外国につながる子どもを対象とした進路ガイダンスの実施状況と意義	５．発行年 2021年
３．雑誌名 人文論叢	６．最初と最後の頁 75-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス	４．巻 3
２．論文標題 移民第二世代の進路選択・キャリア形成支援における課題―三重県の事例を中心にー	５．発行年 2021年
３．雑誌名 桃山学院教育大学研究紀要	６．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス	4．巻 3
2．論文標題 在留ペルー人から見る祭り「奇跡の主」の意義と将来の展望　―第2世代における宗教継承の課題を中心に―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 桃山学院教育大学研究紀要『エレノア』	6．最初と最後の頁 35-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス	4．巻 386
2．論文標題 外国につながりのある子どもたちの人権―学習環境における課題を中心に	5．発行年 2020年
3．雑誌名 ヒューマンライツ	6．最初と最後の頁 30-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 オチャンテ 村井 ロサ メルセデス	4．巻 223
2．論文標題 外国につながりを持つ子どもたちをどう育むか	5．発行年 2019年
3．雑誌名 ガバナンス	6．最初と最後の頁 32-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス	4．巻 9
2．論文標題 移民 1.5 世代、2 世代の日本語習得と公立学校での学習―日系ブラジル・ペルーの子 どもを事例として―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 奈良学園大学紀要	6．最初と最後の頁 31-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス	4．巻 5
2．論文標題 複言語環境にある親子間の課題とカトリック教会の役割―	5．発行年 2023年
3．雑誌名 桃山学院教育大学研究紀要『エレノア』	6．最初と最後の頁 19-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 オチャンテ 村井 ロサ メルセデス
2．発表標題 外国人児童生徒等の就学・進学機会の確保 ー当事者・研究者として考えるー
3．学会等名 外国人児童生徒等の教育の充実に関する有識者会議(第5回)
4．発表年 2019年

1．発表者名 オチャンテ 村井 ロサ メルセデス
2．発表標題 伊賀市での進路支援の取り組みについて ~自身の体験も含めて~
3．学会等名 すべての外国につながる子ども若者の教育保障を考えるシンポジューム
4．発表年 2020年

1．発表者名 オチャンテ・村井・ロサ・メルセデス
2．発表標題 移民 1.5 世代、2 世代の日本語習得と公立学校での学習―日系ブラジル・ペルーの子 どもを事例として―
3．学会等名 国際研究集会2019　多言語化する学校とバイリンガリズム―フランス・カナダ・日本
4．発表年 2019年

１．発表者名 江成　幸
２．発表標題 三重県における外国につながる高校生の増加と進路支援の課題
３．学会等名 第96回日本社会学会大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 Rosa Mercedes Ochante Muray
２．発表標題 Keeping the Faith: An Immigrant Family`s Strategies for Preserving Their Religious Identity.
３．学会等名 The Twenty-fifth Asian Studies Conference Japan (ASCJ)
４．発表年 2023年

〔図書〕　計4件

１．著者名 樋口　直人、稲葉　奈々子（編著）、オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス	４．発行年 2023年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 232
３．書名 ニューカマーの世代交代	

１．著者名 大山　万容、清田　淳子、西山　教行（編著）、オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス・大山　万容	４．発行年 2022年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 184
３．書名 多言語化する学校と複言語教育	

1．著者名 中村哲（編著）・オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス	4．発行年 2020年
2．出版社 銀河書籍	5．総ページ数 270
3．書名 『桃山学院教育大学 教員養成カリキュラムの持続的構築―教職課程科目のカリキュラムと授業実践を焦点にして―』担当箇所：第15節 多文化共生社会に求められる授業実践(pp.195-204)	

1．著者名 ハイメ・タカシ・タカハシ、エドゥアルド・アサト、樋口直人、小波津ホセ、オチャンテ・村井・ロサ・メルセデスほか2名	4．発行年 2024年
2．出版社 インパクト出版会	5．総ページ数 352
3．書名 ペルーから日本へのデカセギ30年史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	オチャンテ　ロサ (Ochante Rosa) (00784042)	桃山学院教育大学・人間教育学部・准教授 (34430)	
研究分担者	谷垣　映子 (Tanigaki Eiko) (70303716)	三重大学・人文学部・助教 (14101)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関